

ADULT  
ONLY

VOL. 8



しゅごしゅご



ぱっぱ



Lele

12/22/8



# 目次

表紙	イラストレーション 流一本	
中扉	イラストレーション 流一本	
目次		2
タマの飼い方(こみつく)	流一本	3
書庫饗宴(SS)	白蘭	19
タマ飾(タカ牌付、タカ牌なし)		
	(イラスト) くらうさぎ	28
奥付		





いやあ ああ ああ ああ ああ





ヤレヤレ  
しばらく寝かせて  
おけばいいだろ

フ  
#  
川



パ：パンツが  
丸見えじゃ  
ねーか！



しかしこのまま  
じゃ頭がいくつ  
あつても足りねえ  
ぞ：：  
なんとかして立場を  
逆転させないと

う……ん



よし……



……



うう

ド  
キ  
ニ





何これえ!!?

なっ...

ん...



カー

ゆ...雄二  
あなた!?

ふふふ  
いい格好だね  
あねき



悪いけど  
姉貴の弱み  
握らせて  
もらうから

もうこれ以上  
頭割られたり  
使いつばにされる  
のはゴメンだから  
ね

何バカな事  
言ってるのよ！

早くこのローブを  
ほどかないと  
後でひどいわよ！！

姉貴さ  
オレのエロビデオ  
時々こっそり  
見てるだろ

わかるんだよね  
そーゆーの

なっ…

ふーん

そんな事が  
まだ言えるんだ



だめっ

あっ!?

やっぱり一人で  
こんな事して  
たのかな?

いやあああ

ふああああ

アッア



やっ

あはああん♡



あっ

ここ  
コリコリして  
きた



バカ雄二

ホントにもう  
止めないと…



あ〜、  
やつは女の子は  
ここがいいんだ

あ…あん

ああん♡



い・や・だ

わたし…  
わたし…



お願いよ  
もう…  
いぢらないで

ひいん♡









おしりの中…  
弟になめられて  
てりゆう♡

おしり…

はあ

あ…

フル

フル



姉貴のしり穴を  
なめられるなんて  
夢みたいだよ

チュ  
チュ  
チュ  
チュ  
チュ

美味い…  
環のお尻は  
直腸の汁も  
美味いよ!



姉貴の肛門って  
直腸口が丸見えに  
なるくらい拡がる  
んだね

はあ  
はあ

自分で  
拡張したん  
♡

いや…

そんなに奥まで  
のぞかないで

ハア?



で…でも

やっぱり姉弟でなん

今すぐこいつで姉貴の穴をほじってやるよ



どお姉貴初めて本物のちんぽをくわえた感想は？

ん…



何言ってるんだよ今だつて涎を出しながら欲しがつてるだろ

前の処女は貴明にとつて置いてやるから



ん…

ちんぽ

キレる



ほらちやんとおねだりしなよ

お…お願い…  
雄二のお…  
おち●ちんで…

ネチ

環のアナルを…  
犯して…下さい…



ああ〜ん♡

よしっ！



すっすっ...

すっすっ♡

弟のおち●ほが  
お姉ちゃんのアナル  
じゅぼじゅぼに  
犯してるう

弟とアナルセックス  
してるの♡



70000

はううん

めくれてるう

お尻が  
めくれてるう♡





ああん♡

あん♡



ひやああん♡



あん♡

あ...やあ...

クリ...  
クリがこんなに  
勃起してる...

あ...

すごく  
固くなってるの



い...いく  
お尻も  
いつちゃう...

いつちゃうのさ



ニッ

グワッ

グワッ

グワッ

グワッ

ドゥッ  
グワッ  
グワッ  
グワッ

グワッ  
グワッ





うっ!?



よお貴明  
見てみなよ  
この素直で  
エロカワイイ姉貴を

タカカ坊

見て見てえ  
このバックリ拡がった  
おま●ことお尻♡

ほらあタカカ坊も  
こつち来てわたしの  
お●んこおち●ちん  
挿れてえ♡



# 書庫饗宴

著者 白蘭

四時限目が終了し、雄二と一緒に飯を食うべく食堂に入る。途中で合流したタマ姉とこのみも一緒だ。食堂は混み合っていた。さながら、飢えた学生が餓鬼道に落ちたじ者のように群がっている。

「……たかあきくんっ！」

食堂の入口で愛佳に呼び止められる。我らがクラス委員長、「委員長ちよ」こと小牧愛佳だ。

「愛佳、……なに？」

「や、や、あの大したことじゃないんですけど……」

雄二やタマ姉たちが一緒にいるのに気付くと、愛佳は話すらそうだった。書庫で二人の時は、結構話せるようになったが、こういう場では、まだダメだった。

「雄二……」

一緒に来ていた雄二に注文と席取りを頼み、愛佳の話を聞くために通路に戻る。入口では通行の邪魔になるし、第一うるさい。

話はなんてことはなく、新しいお菓子を持ってきたので、放課後書庫にこのことだった。

愛佳らしいといえば、愛佳らしい。この間のクッキーの失敗のリベンジをしたいのだから。

食堂に戻ってくると、雄二がテーブルに陣取っていた。律儀に食べるのを待っていてくれたようだ。

「悪い、持たせちゃったかな……」

「持った持った。もう飢えて死にそうだよ！ 姉貴が、貴明が来るまで持ちなさいってさ、おあずけを食らった犬かっつーの！……あが、あががが……」

タマ姉の鉄の爪が瞬時に雄二のこめかみをホールドする。

このみから頼んであった。Aセットのトレイを受け取る。本日のAセットは

エビフライ定食だった。

「ねえ、タカくん、今の人……」

このみが、疑問をぶつけてくる。俺はエビフライを口に運びながら、なにも考えずに答えを返す。

「ああ、愛佳は、はむ、……うちのクラスの委員長だよ……、んっく、たまに書庫で手伝いをしてるから、お礼がしたいって話」

冷凍物に熱が加わっただけ、と思えるのエビフライを咀嚼しながら会話を続ける。

「……」

こちらに向けられた怪訝な三人の視線に気付く。

「愛佳……、ねえ」とタマ姉。

「愛佳で……ありますか」とこのみ。

「マナマナか……」と雄二、……マテ！

「マナマナってなんだよ！」

そんな、怪しい名前を呼んだ覚えはない。

「いやいや、そうはおっしやらせずに、今の、『愛佳』ってのには、新鮮なヒビキ

がありましたよ、ダン・ン・ナ！……くはあああ！」

メキイッ！

再び、襲い掛かった、鉄の爪。

「雄二は、なにを戯言をほざいてるのかしらね。タカ坊は同じクラスの委員長だつて言ってるじゃないの」

「貴……明……、へ……ヘルプ、ヘルプミー……。助けてくれ……」

救援の手を伸ばしたいところだが、こちらに矛先が向いたらデッドエンドに逝きかねないので、無視することにした。往生してくれ。

「タカくんタカくん、書庫で手伝いつてなにをしてるの？」

「何って、ひと気のない書庫でやるのは、ナニに決まってるぞ、このみ。ひぎ

い……」

「また、戯言をほざいてるの！ 懲りないわね」

解放されたのもつかの間、三度、食い込む鉄の爪。実に懲りない奴である。

「ただ、書庫の本の整理を手伝っているだけだよ」

「そーなんだ、やっぱり、タカくんは優しいね」

「そうそう、雄二と違ってタカ坊は紳士なんだから、女の子には優しいの。ね、タカ坊」

タマ姉と視線が合う。タマ姉は口もとに薄く笑みを浮かべていた。

放課後、授業が終わるなり、書庫に足を向ける。カギは開いており、もう愛

佳は来ているようだった。

「愛佳……？」

ドアを開け、中の人に問い掛ける。

「たかあきくん？ ごめんなさい、掛けて待つていてくれる？」

言われたとおり、ソファにかけて待つてしていると、愛佳が紅茶を乗せたトレイを持って現れる。

「はあい、お待たせお待たせ、今日は『ととみ屋』のカステラなんだから、きつとたかあきくんも気に入るよお」

（ととみ屋のカステラか……。しかし、よく手に入ったな。確かに美味しそう……）」

「さあ、さあ、じっくり味わって食べてね。もうこの味を知ったら病みつきになるんだからあ」

とでもうれしそうな愛佳を見てると、ツツコミを入れるのは止めておこうという気になる。

「あ、ごめん、わたしのだ……」

お茶うけを堪能してまったりしていると、どこからか電子音が響く。清閑な書庫には似つかわしくない音だった。

「ん？」

「あ、ごめん、わたしのだ……」

愛佳はカバンを取り上げ、中から携帯電話を取り出した。

「いつけない、もうこんな時間なんだ……。たかあきくん、わたしちよつと用事が……」

「そう？ まあ、十分に堪能させて頂いたし、こっちは問題ないけど……」

愛佳は手帳に挟んである時刻表で、バスの時間を確認しながら、

「うん、ほんとごめんね、わざわざ来てもらったのに……。えと、バスの時間が……。四時二十九分だから……。バス停まで……。ああ！ 急がないと間に合わないかも……！」

学校からバス停までの徒歩の時間を計算してららしい。

「ああ、急がないと……。あ、片付け、洗い物……」

また、小動物のように慌て始める。見かねて、助け舟を出した。

「愛佳、こっちに貸して」

「え、なに？」

「いいから、愛佳は用事があるんだろ？ 片付けと戸締りはしておくから」

「でも……」

「たまには、いいだろう」

呼び出した方が先に帰るということに、愛佳には納得できないのだろう。しかし、愛佳の反論を許せば、押し問答が続く、結局時間にも間に合わなくなるだろう。ここは無を言わずに決めてしまおうが良い。

「じゃ、じゃあ、お願いします」

と言つて愛佳はカギを差し出してくる。

「はい、了解、カギは明日返すから。さつ、早く帰りなさい」

カバンを持たして、愛佳の肩を押す。

「ほんとに！ ごめんなさい！」

「大丈夫だよ、それより、バスの時間に間に合わなくなるよ」

「じゃあ、また明日！」

ドアノブに手をかけるが、勢いのついた体が止まらなかった。どあが、開き切る前に、慣性のついた体が、ドアにぶつかる。

「あいたつ！」

「ほら、慌てないで……」

「や、や、大丈夫。ちよつと、慌てただけだから……。ほほ、ほんとに平気だよ……」

実際に心配である。

急いでドアを潜る愛佳を見送った。

「ふう、やれやれ……。さて、片付けといきますか……」

カチャ！

ひとり、貴明が残った書庫のドアが開かれる……。

「はあ、はあ……。よかつた。バス……。はあはあ、間に……。合いそう……。バス停まであと少し、この角を曲がればバス停が視界に入る。まだ、バスが来てなければ、もう大丈夫だった。」

「え、……。あれ、あれ？ 忘れ物……」

定期がない……。さっきのドアにぶつかった時に落としたのかもしれない。バスの時刻表をみると、急いで引き返して、戻ってくれば、次のバスには間に合いそうだ。そのバスに乗れば、面会時間には間に合う。ギリギリだが……

看護婦さんはみな、同情的なので、面会時間内に間に合えば、多少の居残りには寛容だ。

「急がないと……」

決断すると、翻つて、来た道を引き返し始めた。

書庫の前まで来ると声が断片的に聞こえてくる。慌てて、戻ってきたものの、やはり忘れ物したのは、バツが悪い……。そつと、書庫のドアを開ける。

「よかつた。まだ、たかあきくんいるんだ。……誰かと一緒なのかな？」

人がいるような存在感と、会話が漏れてくる。

ドアのあたりを見渡すと、ドアからそれほど遠くない本棚の脇にバスケースが落ちていた。見つかるかと少々バツが悪く感じそうなので、足音を忍ばせて、バスケースの下までたどり着く。

「よかつた……」

バスケースをカバンにしまい、出て行こうとすると、より近づいたためか、会話が漏れ聞こえてきた。

「あら、もうこんなになつてるじゃない。ふふ、こんなところなのに、我慢が  
できないの？」

「うっ……、タマ姉……」

「え？ ええ？ なに、なにを……」

漏れてくる会話が、日常会話から離れてるのに気がついた。おそろおそろ、本棚に隠れながら、視線を覗かせる。

そこには、自分が想像していた異常の光景が展開されていた。

テーブルに寄りかかりながら、貴明が立っている。……が、問題は驚くいて  
いる女性がいるのが違和感を出していた。

「あそこにいるのは、たかあきくん……。あの人は……。昼にたかあきくん  
といっしょに食堂にいた人……。だよね？」

目の前で展開されている情事に、思考がパニックを起こしていた。

その女性は貴明のズボンを足元まで落とし、下着の前から緊張を引っ張りだ  
していた。

「わ、あわわっ！」

貴明の男性器が、視界に入り、慌てて視線を外す。知識としてはあるものの、  
目の前で展開されている光景は刺激的過ぎた。

「タマ姉、すこい……ああッ」

貴明が腰を引いてしまおうとするが、それより一瞬早く、環の唇が若い肉棒  
をとらえた。

「あう！」

「あう……、びちゃ……」

「や、やめて、タマ姉……うああ、だめだよ、そんなことされたら、……うあ  
あッ！」

環は舐めるのを一時中断し上目使いに貴明を見上げる。

「どう、タカ坊？ あの子、愛住って言ったわよね。その子と会つてる図書室  
で、タマお姉ちゃんのお口でイっちゃうんだ、タカ坊は！」

環の裏側で尿道口を擦りつつ、龟头のくびれに舌を巻きつける。先端から次々  
と溢れてくるガマン汁を、音をたてて吸って行く。

「ふうう、んっ、ふううんっ」

汗ばんだ顔を前後に振りたてる。ジュブジュブと淫靡な音が、泡立つた唾液  
とともに環の唇の端から溢れ落ちる。

「出る、俺、もう出ちゃうう！」

射精直前の、膨張した龟头に軽く前歯を立てられた瞬間、  
「うくう……くっ……くっ……くっ……ううう……っ！」

熱い弾丸となった精液が、環の口の中に飛び込んだ。

「んう……ん、けほっ、けほっ、……」

貴明の精液はかなり濃厚で、喉に絡んできた。何度か嘔きこみながらも、な  
んとか嚥下する。

「あ……の、飲んじゃったの？」

フェラチオという行為に知識はあるものの、男の精液を嚥下するなんて行為  
は愛住の知識にはなかった。初めて見る淫靡な光景に自失呆然としていた。

「けほ、けほっ……んもう、タカ坊、いっばい溜めてたのね。ドロドロです  
っごく濃かつたわよ？」

「あ、こ……ごめん……」

「いいわよ、タカ坊が気持ちよくなると、私も嬉しいんだから」  
そんなタカ坊の様子を眺めると、もつと悪戯したいという欲求が湧いてくる。

「わああ、ま、タマ姉、またっ」  
「タカ坊のオチンチン、まだこんなに硬いじゃないの。もう一回くらい出せる  
よね？……んんっ……んぶう……ちゅる……じゅぶっ……」

たつた今放出したばかりだというのに、ちよつと舌を這わせただけですぐに  
元の硬度を取り戻した。

「……ほら、タカ坊は、ここをチロチロさせるのが好きなんだよね？」  
環の言葉通り、まだ精液が残っている尿道口を舌先でくすぐられた肉棒は、  
一段と硬さを増して行く。

「……」

愛住は、金縛りにあつたかのように、本棚の影からその淫靡な光景を凝視し  
ていた。

「す、すこい……、ま、まだ……」

身近な人間、それも自分が好意を持っている男の行為がこんなに淫らで、官

能的だと理解した。

愛佳の右手が無意識に股間に伸びていく、すでに左手は制服の下に潜り込み、ブラジャーの上から胸のふくらみを撫で回していた。

「だめ、だめよ。ここ、こんな……、こんなこと……、でも、熱い……熱くなってるよ！」

しかし、身体は一度点火した疼きを抑えるところか、さらに苛烈な刺激を求めてくる。

乳首が尖り、女帝からはだくどくと淫汁が染み出てくる。包皮に覆われていた淫核もむくむくと膨らんで来た。

半開きの唇から熱い吐息がもれ、全身の毛穴が開き、汗がじつとりと白い肌を濡らしていく。

「ああ、熱い……身体がどんどん熱くなってきちゃうよ……どうしよう、わたし、こんなことをしてるの見つかつたら、恥ずかしくて死んじゃうよお」

覗き見してるだけでも気まずいのに、それをオカズに自慰までしてるなど、到底知られたくないことだ。理性こそさつさとこの場から立ち去るように最大級の警告を発しているが、牝の本能がそれを受け入れない。むしろ見つかるかもしれないというスリルが危険なスパイスとなって愛佳を昂ぶらせていた。

「んっ……ふう……ふうふう……」

歯を食いしばり唇を噛みしめても、官能の上昇に伴う喘ぎ声を完全に殺すことができない。声を出せないという苦しささえも、絶頂への階段を昇る手助けになってしまふ。

（止まらない……アソコをいじる指が、全然止まらないよお）

ショーツの上からでは物足りない、愛佳の右手はすでに直接秘製に触れている。肉の薄い陰唇に骨みこまれて肉ピラを、指を使ってこねくりまわす。そして、そこまで昂ぶっても、いや、昂ぶってるからこそ、その視線は貴明と環の肉欲に溺れる姿から外せない。

環は制服のボタンをはずし、胸元を大きくはだけさせる。ブラジャーを捲り上げると、二つの乳房がシャツを押し退けるようにして現れた。

「ねえ、タカ坊、コレを使って気持ちよくしてあげる」

両手で下から持ち上げるようにして、乳房を貴明の目の前まで持っていく。

「見てるだけでいいの？ 欲しいんでしょ？ タマお姉ちゃんのオッパイ、好きにしたいんでしょ？」

「うう……」

形が変わるくらいに乳房を揉みしだきながら、人差し指の腹で乳首を転がす。指を口に含み、たっぷりと唾をまぶしてから、粒立った乳輪を円を描くように

撫でまわす。硬くしこった乳首と濡れ光った乳輪に、徐々に貴明の目が血走ってきた。生唾を何度か呑みこみながら、それでも懸命にこみあげる欲望に抗っていた。

ピクピクと痙攣しているペニスを、いきなり胸と胸の間に挟んだ。貴明のペニスは、環の巨乳にすっかり埋もれてしまふ。

「うわあ！ や、柔らかいッ！ タマ姉の胸、すごい……うあああ……」

あまりの気持ちよさに、自然に、腰を突き出し、まるで乳房を犯すような姿勢になつてしまふ。

「タカ坊のオチンチンが、私のオッパイのなかでどんどん硬くなってわよ？ ……ねえ、こういうのは、どう？」

乳房を左右から寄せあげていく。乳肉でペニスをしごくようなその動きに、貴明の口からうめき声があがった。

（凄い、あんなこと……）

女として憧れすらいだきそうな双丘に包まれて、貴明が喘いでいる。目の前で繰り広げられる光景に目を奪われつつも、愛佳の身体は敏感に反応するようになっていた。双丘の乳首は勃起し、なめらかな肌は上気し、薄桃色に染まっている。秘部の敏感な突起は簡単に包皮を押し退け、むくりと顔を出してくる。

（や、やだあ……、今ならまだ間に合うかも。こんなところで……覗きながらクリトリスなんて触っちゃいけない……、でも……）

愛佳がもつとも感じる部位は、当然クリトリスだった。普段のオナニーでも、イクのは決まってここを激しく擦ったときだ。

（触る……いいよね、……こんなに大きくなってるクリトリス触ったら、すぐにもイッちゃうかも……）

自問自答を繰り返しながらも、愛佳の指はいまにも肉芽に触れそうになっていた。

バイズリには、膣壁のような絡みつくような刺激はない。愛液のヌラつく快感もない。その代わりなめらかな素肌の心地よさとマシユマロに包まれているような温もりがあった。なにより、完全勃起の肉芽をすっぽり呑みこんでしまう圧倒的な乳房が目の前で蠢いている。それを見ていただけでも、すぐにでも達してしまいたいような興奮を覚えるのだ。

「そろそろ、イキたくなってきたでしょ？ いいわよ、私のオッパイにいつぱい射精して、ほらこうすればもつと気持ちよくなるからね」

ペニスを軸に、そのまわりを包みこんだ二つの巨大な乳房をまわす。最も回



転したときには、左右の乳房が肉棒を挟んで上下に並んでしまう。極上のパイ  
ズリが貴明の目の前で展開していた。

「ああ、イク、イクそうだった……ああ、タマ姉、あ、あ……出るう！俺、俺  
……あああ！」

「ンンン……ッ」

胸の谷間の中心、心臓のあたりに向けて灼熱が弾けた。二度三度と胸肉に挟  
まれたベニスが痙攣し、大量の白濁汁が吐き出される。

「アア、感じる……オッパイにタカ坊がいつばい出してる……ッ」

ドクドクと脈打つたびに、灼熱の面積が広がる。そのすべてを豊満な乳房で  
受けとめ続けた。

胸を支えていた手を外すと、谷間から勢いよく肉棒が跳ね上がった。自らの  
出した精液にまみれたそれはまだまだ硬度を失っていない。

胸と胸の間には、べつとりと欲望の証があった。なかなか垂れ落ちてこず、  
まるで糊のように漿の肌張り付いていた。

「フフ、ずいぶん出したみたいね」

そのザーメンを手のひらで乳房全体に塗りこむように広げながら、妖艶に微  
笑む。釣鐘上の柔肉が、精液で白っぽく濡れ光っていた。

（たかあきくん……、イツてるんだ……、わたしも、イツていいよね……）  
大きく息を吸い込み、覚悟を決める。

「ッ……ふうあああッ！」

中指の腹が肉芽をさすった瞬間、愛佳の目の前に白い星がいくつも散乱した。  
舌が口の外に飛び出し、眼球がぐるりと裏返る。

（なっ……なにこれえ！す、すこっ……こ、こんなの……こんなのって、初  
めてえ！イツちやう……クリトリス触っただけでイツちやうのおし）

覗き見という背德的な行為のせいだろう、愛佳の肉体は自分でも思っている  
以上に敏感になっていた。そのため、いつもと同じ刺激が何倍もの大きな波に  
なつ愛佳の身体を揺さぶった。

「ふっふん、んんふうー！」

慌てて左手の甲で口元を押さえるが、絶頂の悲鳴は一向に収まってくれない。  
（イツてるのにッ！私、さつきからずつとイツてるのに、全然イクのが終わ  
らないよお！声が……声がでちゃう……！）

その場で崩れ落ち、ビクビクと何度も痙攣する。愛液とは違う液体が尿道口  
と膣口から噴きだし、床を濡らしてしまう。

貴明が脱力しきった身体を起こすと、環が背後の本棚の方に視線を送ってい

た。

「タマ姉……？」

「……ふふ、なんでもないわ……」

視線を元に戻すと、相変わらず股間のモノは充分すぎる大きさと硬度を保つ  
ていた。

「タカ坊は、まだ元気ね。じゃあ今度は、観客にもサーピスしてあげないと、  
いけないかしら？」

「え？……観客？」

タマ姉は、行為の終わった、乱れた衣服のまま、ドアから本棚に向かう。

本棚に裏に回り、隠れて覗き見ていた観客を引つ張り出す。その観客もくつ  
たりとしたまま引き出される。

「愛佳……」

「たかあき……くん……」

「さて、……どうしようかな……」

ともに絶頂後に脱力をした二人を眺め環は口元に艶やかな微笑を浮かべる。

愛佳の胸を引き、貴明の前まで連れてくる。

「小牧……愛佳さんだったかしら、覗きなんて、いいご趣味ね……」

「これはですね、付けっして、覗いていたわけではなく……」

書庫で行為をするほうにも問題があるが、覗いていたという後ろめたさがあ  
るせいで、愛佳はかなり慌てていた。

「そうね……、ただ覗いてんじやなくて、覗きながらオナニーしてました、と」

「あ、あの……、これは……」

さらに状況を突っ込まれ、愛佳は返答に詰まる。

「こんな状態にしても、まだそういうことをいうの？」

うろたえた愛佳の背後に環が素早く回り込み、愛佳のスカートを捲り上げる。  
そこには、淫汁でくちよくちよになった下着があった。環の指が濡れた秘部を  
こねくりまわす。

「あ、ああ……」

「くちゅ……くちゅ……」

「すこいのね、こんなになるまで、オナニーしてたんだ。かわいいわよ、愛佳  
……」

愛佳は羞恥でもう判断ができないようだった。貴明がようやくことが飲み込  
めたのか声をかける。

「タ、タマ姉……」

「タカ坊には、少し大人しくしてもらおうかな……」  
脱力した愛佳を少し放って、貴明の方に両腕を掴み、組み敷いていく。解いたりポンを使って、テーブルの脚と縛っておく。

「え？ タマ姉……」  
「ごめんね、タカ坊少しの間だけだから……」

再び、愛佳に近づくと、

「で、ごめんね、あなたにも参加してもらおうわ……」

後ろから、組み付き胸などに愛撫の手を這わせる。制服が捲れ上がり、きめ細かそうな肌が露出していく。

「んあ……やっ……やあ……やめて、お願いだから……ああ……」

制服の上からでもはっきりとわかるくらい、乳首が硬くなっている。赤く染まった首筋に舌を這わせながら、頬はさらに愛撫を加速させていく。

「こんな状況なのに、こんなに感じてるんだ……、ずいぶんと感じやすいのね……」

「ああ……、こんな……こと……イヤああ……」  
ちよつとした悪戯を仕掛けてみることにした。

「タカ坊、私がいって言うまで、愛佳から目を離しちゃダメよ、いいわね？」  
「は……はい」

貴明も興奮しているのだろう、食い入るような目で愛佳の身悶える姿を凝視していた。

「やあつ、見ないで……お願い、こつち見ちゃダメええ……はああん」  
いつの間にか制服のボタンが外され、ベージュ色のブラジャーが露出して

いる。さすがに顔には見劣りするが、柔らかかなふくらみが制服から突き出している。白く深い谷間にはうつつすらと汗が浮き、素肌を妖しく光らせている。

「ふふ、綺麗な肌ね。オッパイをいじられるだけでこんなに感じちゃうなら、ここを苛められたらどうなっちゃうかしらね？」

「え？ ……んあツ、はふう！ ……いやっ……いやあああああッ！」  
ブラの中に手を差し入れると同時に、愛佳の耳穴に舌先をねじこんだ。

「いやっ、いやいやっ、やめてっ……やああッ！」  
両乳首をつままれ、耳穴を舌で犯された瞬間、愛佳は軽い絶頂に達してしま

った。

「わたし……イッた、の……？」  
ほんの数秒間、愛佳の意識が途切れた。目の前が真っ白になったかと思っ

たら、急に全身に鋭い電流が走った。それが絶頂によるものだとすくにわかった。  
（こんな状況で……たかあきくんが見てる前で、イッちゃうなんて……。たかあきくんに、イクところ、見られちゃった……）

恥ずかしくて怖くて、とても顔をあげられない。貴明がどんな顔で自分を見ているのか、想像するだけで泣きたくなった。

それなのに、股間が熱くなってくるのがどうしようもなく切なく、哀しい。こんなに恥ずかしいのに、身体が反応しはじめているのが恨めしかった。

「イッたわね……、イキ顔がすっごくよかったわよ……」  
「変なこと言わないで……ああッ、やめて、それ以上はダメッ！」

頬の手が、直接乳房を撫で回してくる。

（おかしいよ……勝手に身体がもそもそしちゃうよお。これ以上されたら、きつとわたし……ああ、見られちゃう、いやらしく悶えて声を出すのを、全部たかあきくんに見られちゃうよお！）

どうにかして貴明の視線から逃れようと身をよじるのだが、背後からがっちり抱え込まれており、腕力では敵うべくもない。しかも、今の絶頂で腰から下に力が入らなくなってしまう。

「さあて、愛佳の乳首と乳輪は、どんな色かしら？」  
そんな狼狽する姿を愉しんでいるのだろう、頬はさらに恥辱を加えてくる。

ブラジャーを一気に上に捲り、白桃色の柔肉を曝けだした。

「ダメエッ、……ああ、見ないでえ！ たかあきくん、お願いですからわたしのおっぱい、見ないでえ！」

「ふふふっ、こんなに乳首を尖らして行くに……」  
両方の乳首を指で振り、引っ張り、捏ね上げていく。

「いッ、痛ッ！ や、やめっ……アアッ、やめて、乳首、乳首、苛めちゃイヤア！」

先ほどの愛撫で敏感になっていく乳首が、さらに体積を増していく。乳輪までもがぶつくりと盛り上げる。

快感と苦痛の狭間で、うめくことしかできなかった。

「許して……お願いです、もう……アア、こ、こんな……、あはん、はふう、ンンン……ッ」

しかし、そのうめき声が次第に甘い囁き声へと変質していく。火照った身体を落ち着かせるような、繊細なタッチ。再び耳や首筋を舌で舐められた。

「んうう……ふあああ……ああ、どうしてえ……はああ、浮いちゃう、身体が勝手に浮いちゃうの……」

上半身への愛撫から、徐々に手が下半身に移動していく。スカートの裾がゆつくりと捲りあげられていく。

「やああ！」  
太腿に冷たい外気を感じて慌てて足を閉じようとするが、それよりも一瞬早く、指先がショーツの中に侵入してしまった。

「ああ、触らないでえ！ イヤ……、そ、そんなところまでなんてイヤアア！」

「すごいジュースの量ね。それとも、お漏らししちゃったのかしら？」

指と言葉の責めに涙を浮かべる愛佳を、環が妖しい笑みを浮かべて見ている。身悶える姿に興奮しているのか、環の顔には大粒の汗も浮いて、息もかなり荒くなっていた。

三本の指を花卉に添えると、そのまま円を描くように動かす。こねまわすように、ゆっくりと愛撫する。

「ああ、あん、あはっ……！ ひん、ひはああ……！」

自分で触ったときとは比較にならない、強烈な快感が愛佳の脳を溶かしていき、

「怖い……ああ、指が、指がすごいのお……、どんどん気持ちよくなっちゃうよお……、もう……限界なのお……！ ハァン、はぁん……！」

「いいわよ、イッて、だらしのないイキ顔、しつかりタカ坊に見てもらいなさい！」

「え！」

すっかり忘れていた貴明の存在を思い出し、愛佳に理性が戻る。

「イヤああ！ こんなわたし、たかあきくんに見せられないのお！ 許して……ああ、あああーっ！」

しかし、その理性も一瞬で霧散してしまった。

環の指先が、女体で一番敏感な突起を転がした瞬間、

「ひゃふっ、イク、イッちゃう！ わたし、イカされちゃふう……！ ヒイイ、イクらうっ！」

臍口から盛大に温かい体液を吐きだして、愛佳は今日二度目の絶頂に達した。

愛佳は、ぐったりと横たわっていた。愛液まみれのショーツはすでに脱がされ、捲れあがったスカートも奥には黒々とした秘毛のデルタが見えている。

「さてと、タカ坊、この子抱きたいんでしょ？」

「タマ姉……！」

縛られたままの貴明に近づき、そして、雄々しくそそり立った肉棒を弄る。

「ふふっ、こんなにして、そんなにこの子のいやらしい姿で興奮したのかしら？」

ほうっとした表情で愛佳はこちらに視線を向ける。

「たか……あきくん」

「愛佳……！」

喉が渴いていた……、癒したい、潤したい、渴望だった。もっと根源的な欲求だった。

(……抱きたい。……抱かれない)

「入れたらいいでしょ？ タカ坊？」

「たかあきくん、わたしとエッチするの、そんなにいやなの？ わたしみたいないやらしい女、抱きたくないの？」

淫らな蜜で溢れる臍口を、思いつきりいじられたい。熱く疼く陰唇を、激しく舐めてほしかった。

「そ、そんなことっ！」

「じゃあ、お願いよ。わたしもう我慢できないの……たかあきくん、いっぱい抱きしめてもらいたいのお！ ああ、見て、わたしの恥ずかしいアソコ、いっぱい見てエ！」

絶え間なく襲ってくる痒みにも似た、焦燥感に、愛佳の理性はもう崩壊寸前だった。自ら大きく開脚し、大量の蜜をたたえた秘泉を露出する。

（恥ずかしい……でも……でも、見られるの、気持ちいい……！）

熱く潤んだ陰唇に外気が触れるその感覚に、背中に電流が駆け抜けた。露出の快感に、新に愛液が染み出てくる。

（見られて……こんなに大股ひろげてアソコを濡らしてるの、たかあきくんに全部覗かれてるの……！）

だが、一度露出の喜びを知ってしまった愛佳は、もう足を閉じることができなかつた。それどころか、臍口の奥まで覗いてもらえようと自ら腰を浮かし、貴明を誘うような視線を送ってしまう。誰に教えられたわけではない、女の本能が腰をうねらせた。

「ほらあ、わ、わたし、もうこんなになつてるんだよ？ こ、これでも抱いてくれないの？」

感情の高ぶりに、愛佳の声が涙で滲む。愛佳自身、自分がなにを口にしていくのかわかっていない。ただ、この身体の疼きを鎮めてほしかった。

愛佳の信じられないような変貌ぶりに戸惑っていた貴明も覚悟を決めたのか、思いつめた表情で近寄ってきた。

「……入りたい、……犯したい！」

貴明がそのような欲望をぶつけてくるのがショックでもあるが、心の奥底では喜んで「女」としての自分がはつきりと意識できる。

自分の痴態をみて、好きな男の子が興奮を押さえきれずに、自分にぶつけて来る。それは「女」として確かな喜びだった。

「たかあきくんなら、わたし平気だから……お、お願い……！」

愛佳は顔を横にそむけ、目をつむった。脚はひろげたまの格好だ。

つまり、好きにしたいという意思表示だった。

「愛佳……！」

貴明の声がすぐ近くから聞こえてくる。貴明は今、自分のどこを見つめてい



るのだろうかと思えるだけで、全身が熱くなった。

最初に貴明が触れてのは、桜色に染まった乳房だった。両手で半球を包み込むように、優しく情感のこもった愛撫だった。

「あ……あふっ……」

愛佳の口から吐息がもれる。

「ダメ、声、出ちゃう……」

愛佳の敏感な反応に気をよくした貴明が、さらに乳房への責めを強めてきた。ふくらみの裾のほうから柔肉を搾るように握りしめ、乳首を限界まで尖らせようとする。まるで出るはずのない母乳を搾り取ろうとしているかのよう。貴明は執拗にその動作を繰り返した。

「あん、痛いよ……お願い、あ、あんまり強く握らないでえ……アア、あはあッ」

「柔らかい……」

乳房の先端に神経が集中していくような錯覚に陥る。本当に母乳が噴き出すのではないかと思うくらい。乳首が限界まで勃起していた。異様なくらいピンク色の突起が敏感になっている。

「こ、こんな……乳首、こんなになつてる……」

自分でも驚くほど乳首が垂直に伸び、その周辺の乳輪もこんもりと盛り上がりつつあった。処女の乳首にしてはあまりに淫靡で、あまりに煽情的な光景だった。

「い、いやらしい……わたしのオッパイ、なんていやらしいの……」

貴明がその敏感な頂きに矛先を向けた。あさましくふくらんだ乳輪ごと、乳房の先端を口を含んだのだ。肥大した乳首を舌で転がし、乳輪を舌先でなぞり音をたてて吸い上げてくる。

もう一方の乳首も、指先で執拗にこねまわされていた。

「ち、乳首、ダメえ、りよ、両方なんてえ……あはっ、はうう……イヤ、吸わないでえ……、ああ、乳首吸っちゃダメっ！」

あまりの快感に身をよじって逃げようとするが、両手を縛られたままではそれも叶わない。せいぜい、上半身を少しだけねじるくらいしかできない。

貴明はそんな愛佳に体重を乗せながら、ひたすら乳首を廻りつづけた。舐めるだけでなく、時折乳首を前歯で甘噛みまでしてやる。そのたびに愛佳は背中をのけ反らせながら、ヒイヒイと声をあげてしまう。

「んあああ、あつ、ああっ……ダメ、もう……ああ、溶けちゃうう、わたし

の乳首、たかあきくんが溶かされちゃうよ……ひやふん、ふあああ！」  
愛佳の汗ばんだ肢体が小刻みに痙攣した。チャームポイントである大きな瞳から涙がとめどなく流れ落ちていく。開きつばなしの口からは、苦しげな呼吸音とかすれたうめき声が交互に聞こえてくる。

「やだ……わたし、イツちゃった……オッパイいじられただけで、こんなに感じちゃうなんて……」

環によるものとは根本的に違う快感が、貴明の愛撫にはあった。好きな男に愛撫されるのがこんなに感じることに、愛佳は驚いていた。そして、もっと深い悦びを欲している自分を発見する。

乳房や乳首だけでは物足りない。この身体の疼きの根元である花弁を、愛する男の肉根で貫かれない。大事に守ってきた処女を散らしてもらいたい。

そんな思いが伝わったのだろう。貴明は休むことなく次の性感帯へと顔を移動させた。

体を下へとずらし、脚と脚の間に頭を突っ込んでくる。

「恥ずかしい……ああ、こんなところ、見られるなんてえ……」

どうしようもなく火照る秘芯に貴明の熱い息を感じる。それ以上に視線を意識せざるを得ない。

これほど至近距離に顔があるのだ、愛佳の恥ずかしい秘所はすべて見られてしまっているはずだ。

「アア、み、見えてる？ わたしの……わたしのアソコ、全部見てるの？」

「う、うん、見えてるよ、愛佳のここ……ああ、すごいよ、こんなに濡れて、さらさら光ってるよ……」

「ダメえ、言わないでッ！ そんないやらしいこと、お願いだから言わないでえ……」

密かに思いを寄せていた男が、今、自分の淫らな器官を覗いている。そう思うだけで全身が総毛立ち、蜜壺からはとめどなく透明な愛液が溢れてしまう。

突然、下腹部に生暖かいものが触れた。

「ひっ！……ひっ、ひあああッ」

貴明の舌と唇が愛液で潤んだ秘所を責めたててきたのだ。大陰唇の奥に折りたたまれていた小陰唇も指で捲り上げられ、その裏にまで舌が這わされ、こびりついた汁をすべて舐め取ってしまう。

花びらだけではあきたらず、薄い皮のフードに保護されたクリトリスにまで舌が伸ばされた。指で包皮が剥きあげられ、米粒のように充血した肉芽が外気に曝される。

「やだ、そこはあ……ああ、やめてたかあきくん、お願いだからそこは……んはああん！」

先ほど散々環にいじられた女陰は、簡単に限界まで高められてしまう。

「イヤ、イヤイヤッ、イキたくない！ わたしもうイキたくないのお……んあッ、あああーっ！」  
両手を後ろ手に縛られた上半身を激しくよじりながら、愛佳は今日何度目か



の絶頂へと引きあげられてしまった。制服の間から剥きだされた乳房が、荒い呼吸に合わせずぶると震えていた。頬や目尻、首筋が赤く染まり、処女とは思えないほどの色気を漂わせる。頬には髪の毛が数本汗で張りつき、余計に妖艶な雰囲気強調していた。

「ら、らめ……たかあきくん、わたし……もう……」  
舌がうまく動いてくれない。視点もぼやけ、はつきり貴明の顔を見ることもできない。

「愛佳……いくよ……」

絶頂に震える肉孔に硬い先端があてがわれる。処女の本能に身体が震えた。

「ああっ……あ、あああーっ！」

そして、熱い塊が粘膜を巻き込むようにして愛佳に挿入された。

「痛い……痛いの……たかあきくん……」

「愛佳……大丈夫？」

「ん、へへ、へいきだから……、お願い……たかあきくん……最後まで」

「愛佳あ！」

貴明は一気に腰を押し込み、肉茎のすべてを膣道に収めた。入り口を少し過ぎたあたり抵抗感があったが、その奥からは意外とすんなり進めることができた。

「は、入ってるよお……たかあきくんのが、私の奥まで入ってる……ああ……あああ……」

「……あああ……」

自分の胎内に異物が取められるという違和感に愛佳がうめく。

「ああ、愛佳のなか、あつたかいよ……ぬるぬるしてて、気持ちいい……」

「やだ、言わないで……あつ……まだ痛いの……あくう……」

つらそうに眉を寄せるが、それでも少しずつ和らいているのか、最初ほど痛がってはいない。散々ほくされた女陰が、徐々に肉棒の大きさに慣れてきていた。

「はっはっはあ……ま、まだ痛い……んんっ……はっはあ……」

貴明のペニスを痛いほどの締めつけていた膣壁が少しずつ緩んできた。逆に肉壁が複雑な蠕動をはじめ、初めて受け入れたペニスが絡みついていく。

「アアッ、変なの……入り口のほうはまだ痛いの、奥のほうはむずむずしてるのお……やあ、怖い……こんなの変、変だよお……」

初めての挿入で悦びを感じはじめたことに、愛佳は戸惑いの表情を浮かべた。  
（な、なんなの、これ？……あんなに痛かったのに、それもだんだん薄れてる……ああ、いやよ、初めてなのに感じるなんてダメえ！）

だが、意識すればするほど、膣道の奥をつついてくる熱い存在をはつきりと感じてしまう。雄々しく張りだした力り首、力強く脈打つ肉筒が粘膜を通して

伝わってくる。

「凄いわね……、クリトリスが、真っ赤に腫れ上がって……んんっ」

処女を散らした結合部に、環が舌を這わせ始める。破瓜の血と愛液がブレンドされたモノを舐め上げる。

「ひっ！ な、舐めちゃ、いやあ……、駄目、なの……わたし、きやふう、ああん」

破瓜を乗り越え、感じはじめた肉体が、異常なシユチュエーションに昂り始めていた。

「か、愛佳……ああ、愛佳あ！」

肉棒を柔らかく包み込んでくる肉壁の心地よさに、最初に貴明のほう折れた。愛佳の名を叫びつつ、腰を前後に振りたてる。愛液と破瓜の血に濡れた肉棒が、ぐちぐちと音を立てながら膣口を出入りする。

「はあん、あん……深い、たかあきくんのが、お腹をずんずんしてくるう！」  
裂かれるような痛みはいつしか遠ざかり、代わりに脳が痺れるような鈍い快感が下腹部を襲う。今まで触れたことのない場所を亀頭に擦られるという快感に、次第に溢れる声を堪えられなくなっていた。

「二人とも、凄くいやらしい願してる……」  
環は、激しく突き入れられる結合部から離れ、愛佳の双丘を弄りはじめる。

形のよい胸を粘土のように捏ねくりだしていく。

「ああっ……やん……やっ……はあ、ダメ、ダメなの、こんなのダメなのにお！……いい、気持ちいいのお……、たかあきくんに擦られるの気持ちいいのお！」

そしてついに、愛佳は自ら感じていることを口走った。一度言ってしまったことで精神のたがが緩んだのか、愛佳の喘ぎ声は一気にエスカレートしていった。

「イイっ、そこ、感じるのお！ いけないのに、初めてなのに、奥まで突かれて感じちやつてるのおおっ！ アア、もっ……もっ……もっといっばい快っつてえ！」

「フフ、もう感じてるの？ ついさつきいまで処女だったのに、いやらしい子ね？」

汗と涙に濡れた愛佳の顔を、妖しい笑みを浮かべた環が覗き込む。

「さ、最初は本当に痛かったのに……ああっ……なの、ふアん……奥を擦られると、気持ちよくなっちゃうのお……、ああ、当たってる、たかあきくん、深すぎるう！」

制服を汗でびったりと肌張り付かせながら、愛佳が床の上で身悶える。

乱れたスカートの裾から覗く太腿が、無意識に貴明の胸に絡み付いていた。自ら腰を浮かし、より深い結合を求めてしまう。

肉棒が女陰を出入りするたびに、染み出た愛液がぐちぐちとあたりを飛

び散る。すでに破瓜の血も洗い流され、溢れてくるのは白く濁った粘液だけになつていた。

「タカ坊、同じように突くんじゃなくて、いろいろな角度をつけて腰を振りなさい」

貴明も限界が近いのか、顔を真っ赤にして、それでも環の指示通りに怒張の角度を変えてきた。今までは異なる場所への刺激に愛佳がいよいよ追い立てられる。いやいやするように頭を振り、嗚咽をもらす。貴明の背中で組み合わされた両足のつま先がピンと反り返っている。

膣道はまるで熱湯を注がれたように熱く、カリに引つかかれるたびに、腰が浮き上がる。処女膜を失った痛みなどとうに消え去り、残ったのは純粹な快楽だけだった。ペニスを突き入れられ、肉壁を抉られ、秘毛同士が擦れるたびに、一步一步絶頂への階段をあがっていく。

「溶けちゃうよ、溶けちゃうっ。ダメえ、もうおかしくなるの、わたし、もう無理い！」

「いいのよ、愛佳。イキなさい。タカ坊にオマンコ溶かされて、好きなだけイッちゃいなさい！」

「イヤ、こんなのおかしいっ……くう……イ、イク……、ダメなの……、イッちゃう……ああ、イクうう！」

食いしばつた歯の間から、愛佳の生臭い声が飛び出した。

アクメに達した膣道が急激に窄まり、貴明の肉棒を締め付ける。限界まできいていた若勃起がそれに耐えられるはずもなく、貴明はあっさりとした熱い精を愛佳の胎内に放ってしまった。

「ああで、で、出てる！……なか、なかにっ！ いっぱい出されてるっ！」

子宮口を叩かれるような射精のショックに愛佳が髪を振り乱して喚いた。女性の一番奥に放たれた精の熱が、じんわりと膣粘膜に染みこんでくる。初めて体験するその感覚に、愛佳の肢体はビクリと跳ねた。

貴明のペニスはさすがに力を失い、半勃ちのままずるりと秘口から抜け落ちた。

とても今まで肉棒が入っていたとは信じられないような狭い肉孔から、愛液と精液の混じった淫汁がどろりと溢れ、床を汚した。

「フフフ、気持ちよかったですよ？ やっぱり生で中出しが一番感じるわよね」  
ロストバージンとアクメの衝撃で放心状態なっている愛佳を背後から抱き起こしながら、環は目を細めて微笑んだ。

閑静な書庫に、淫靡なる饗宴が、続いていく……。







## あとかき 代りのスタッフの日常つーが、2チ

白瞳 「LeLe☆ばつば8」をお買い上げ頂きありがとうございます。

くろさき なんとがLeLe☆ばつば8TH2タマ姉の本が出せました。

白瞳 どうなる事かと思いましたがね。夏頃実録内容何にするか結構悩んだんですよね。

くろさき みんなそうなんだよ。流一本も悩んでたみたいなので、レパートリー広げてあげようと思って、東鳩2のタマ姉の巨乳物が、舞HiMEの舞の巨乳物が、ガールズブラボアの桐絵の巨乳物が、幅広い選択肢をあてたんですわ。

白瞳 思いつき、せまいわ! て、ゆーが偏りすぎ!

くろさき 巨乳系より姉系の方が良かったか?

白瞳 タマ姉なら両方条件にはまってるぞ。巨乳で姉キャラだ。

くろさき とゆーわけで、タマ姉ですよ!

白瞳 しがし、冬コミ前にPC版発売とはTH2も同人作家に挑戦的だね。

くろさき 発売日に買いに行ったくせに……。

白瞳 仕方なかったんじゃー! タマ姉が……、呑員ちょが……。

くろさき フェイトのファンディスクも発売日に買ってたぞ。

白瞳 仕方なかったんじゃー! セイバーが……。

くろさき そんなもん知るが! まあ、本も出せだし、俺もTH2がやつと攻略できるわ。

白瞳 マテ! セーブデータを他人から入手するのは攻略なのか?

くろさき 俺の脳内では攻略ですよ。インストールして、一緒にセーブデータもインストールして、攻略完了!

白瞳 腐ってやがる。あつしも、PS版でやったので、結構スキップで飛ばしただけだな。ちなみに攻略順は、タマ姉→呑員ちょ→他→新キャラ「さらら」だったかな。

くろさき 他って、かなりイーかげんな扱いだな、おい。

白瞳 あ、双子はちょっとゆつくりやったよ。イルファがいるからな。

くろさき メイドロボが……。

白瞳 でも、セリオはいないんだよな……。

くろさき 君はASIMOでも攻略してなさい。

白瞳 あんな中腰で走る機械は要らんわ。TH2では、セリオが攻略可能になると信じていたのに……。機械はまだ人工キャラってツボなんだよ。

くろさき そうなん? その割にはマルチは無視やん。

白瞳 感情が完全に表現できないっほい方がよいのです。最萌は「ガレーン・ヌーレンブルグの人形唄」!

くろさき むう、わからん。「ローゼンメイデン」みたいなものが?

白瞳 流一本はわかったのに、詳しくは魔界都市ブルースを読みなさい。それにあつしは「ローゼンメイデン」より「なのは」観てるよ。

くろさき ああ、あのガリアンソードがてるやつ。

白瞳 ガリアンソードゆうな! 脱線しまくってるぞ。次は呑員ちょメインにしたいね。

くろさき 巨乳じゃないじゃん! だいたい、次なんて先のことわかんないって。

白瞳 それもそうだな。まあ、頑張って次も出せるようにすると。

くろさき そうそう。

白瞳 て、この異常気象のような雪はなんだ……。

くろさき 長い修羅場を抜けると、そこは雪国でした。

## 奥付

発行 リーフパーティー  
発行日 2005/12/30  
発行人 くろうさぎ

連絡先

ホームページアドレス  
<http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/>



リーフパーティーの本